

## 2020 年度新入生へ 系長からのメッセージ

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。

東山キャンパス内では、桜が満開を迎え、早くもそのピークを過ぎようとしています。美しい桜の花を前に、前途洋々と学生生活を漕ぎだそう～といきたいところですが、本年度は新型コロナウイルスの喧騒により、入学式・ガイダンスをはじめ各種新歓イベント等も中止という大変残念な状況となり、昨年度までと同様に…、とはいかないようです。

このような混沌の中ではありますが、皆様が、環境学研究科・地球環境科学専攻・大気水圏系において学生生活を送って頂くうえで、持って頂きたい心構えについて述べたいと思います。名古屋大学の環境学研究科は、地球・都市・社会の3専攻からなり、異分野融合あるいは学際的な観点から、2001年の発足以来、環境に纏わる学問を網羅的に追及しています。ここには、地球温暖化・地震・火山噴火、建築・都市・住環境、および社会科学・政治・経済などの各分野の「知」が結集しており、多岐にわたる問題の捉え方、解決方法を垣間見ることができ、「理学」や「工学」等に限らず「環境学」の学位を取得可能である点も大きな特色となっています。実際には、体経理解科目を中心とした授業・セミナーで異なった分野の知識に触れることになろうかと思いますが、是非この機会を有効に活用し、幅広い視点でご自分の「アンテナ」を広げて頂きたいと思います。

その一方で、ご自身が志す学問分野の専門性の追求も怠るべきではありません。大気水圏科学系の場合、たとえば台風・豪雨等の気象現象や温暖化・大気汚染など、大気・海洋・水圏・雪氷圏の性状や変動を理解するための研究が進められています。いずれの研究テーマを選ぶにしても、なぜそうなるのか？（なっているのか？）という自らの興味「ハテナ」を蔑ろにしないことが重要です。偉い先生が言っているから、複数の論文に書いてあるから、という風に考えれば楽ではありますが（そして、多くの場合、それが実際合っているのですが）、そこから新しい方向性が生まれることは、ほぼないでしょう。是非、自分の興味に正直になり、自分で考える習慣を身に付けてください。そして、自らの力で体得した考え方や知識は、人生の軸・芯となっていくはずですよ。最近のほんの10年～数十年間を見返してみると、地球温暖化や大気汚染等の問題から、3.11東日本大震災・原子力発電所事故、そして今まさ



環境共用館横の桜（2020年4月）

に起きている新型コロナウイルスの問題と、人間社会が変化するときは一瞬であることに気づかされます。自分自身の考えで、強い軸・芯を持つことは、このような激動のなかでは、周りに流されず冷静に物事を判断するために、ますます必要なのです。

皆さんが入学された大気水圏科学系は、主に名古屋大学・水圏科学研究所（1973年～）、大気水圏科学研究所（1993年～）・地球水循環研究センター（2001年～）、そして太陽地球環境研究所（1990年～）に端を発し、これまでに多数の優秀な研究者を輩出してきました。現在、彼ら・彼女らは国内外の機関で非常に大きな活躍をみせています。この伝統ある名古屋大学・大気水圏科学系の灯を絶やすことのないよう、皆さんの力が、今まさに求められています。

社会構造が大きく変化しようとしている現在ですが、上にあげた「アンテナ」と「ハテナ」を武器に、皆さんの名古屋大学での学生生活が実りあるものになることを心から祈願・応援しております。

子曰、

「吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。・・・」

令和2年4月8日

名古屋大学大学院環境学研究科  
地球環境科学専攻(副専攻長)・大気水圏科学系長  
須藤 健悟